中世語彙資料としての『史記抄』

田籠　博

1．研究の動機・方法

京都五山の僧侶桃源瑞仙（1430～1489）の著作『史記抄』（文明九年1477成）は、冒頭の一部（周本紀第四まで）は牧中梵祐の講義に基づくものの、桃源による所謂前記抄物の代表的存在であることは疑いない。

所が、所謂後記抄物の代表たる維高妙安の『玉塵』（玉塵抄）については、専らこれを対象とした研究書が複数あり（出雲朝子氏『玉塵抄を中心とする室町時代語の研究』、山田潔氏『玉塵抄の語法』）、同じ抄者の『詩学大成抄』にも柳田征司氏の大著（『詩学大成抄の国語学的研究』）があるのに対して、『史記抄』にはこれを中心に論じた著書が存在しない。臆測だが、亀井孝・水沢利忠両氏による『史記桃源抄の研究』（日本学術振興会1965～1973）が「本文篇」とあるため、亀井氏による「研究篇」が続刊されると期待されたからであろう。周知の通り「研究篇」は終に刊行されないままである。

『史記抄』の言語について考える方向はいくつか考えられるが、本稿で「語彙」に焦点を絞ったのは次の例に出合ったのを機縁とする。

・イクサヲキラウテ、帯トキヒロケテイタソ。（10-49ウ11）

・縦酒トハ、帯トキヒロケテ、大酒ヲ飲テイタソ。（12-27オ4）

「帯解き広げ」は苗村丈伯の『世話用文章』（元禄五1692刊、3巻）で始めて知った語である。上巻13丁裏の「狼狽昌披」を「うろたへ、おびときひろげ」と読ませ、上欄に火事場から逃げ出す男の絵、帯は解けて手中にある。

「だらしない」姿という意味では同じだが、『史記抄』の語例が無為に自堕落なさまであるのに比べて、『世話用文章』では慌てふためいて走る様である。行動の有無という点で対照的で、これをも意味変化と呼ぶとすれば、中世から近世へと至る200年程の間で生じたものということができる。元禄時代ですら「世話（俗語）」であった語が、早く『史記抄』に存在するこ

とに興味を引かれ、その語彙の性格について総体的な観点から調べてみようと考えたのである。

上に引いた「帯解き広げ」の例は、いずれも『日本国語大辞典　第二版』（以下、「日国」と略称する。）には載っていない。『史記抄』より50年後の『蒙求抄』（1529頃）から初出例（意味は『史記抄』に近い。）が採られている。そこで『史記抄』に存する語が日国でどのような形で用例となっているかを調べ、それを通して『史記抄』の語彙資料としての性格を探ることができるのはないかと考えた。

冊子体の辞書では容易でないが、データベース化された日国では、どの項目に『史記抄』の用例があるかを容易に知りうる。具体的に言うと、大学附属図書館のHPからJapanKnowlege Libへ入り、日国を対象に検索・抽出の作業を行った。

なお、『史記抄』例文の所在は、普及の便を考慮して岡見正雄・大塚光信編『抄物資料集成』第1巻（清水堂出版1971）の古活字本によって示した。

2．日国用例の出典としての『史記抄』

前記の方法により、主な室町時代語資料と、他の代表的な文献から日国がどれほどの用例を引いているかを知るために、文献名で検索すると次の結果を得た。

『日国』所見文献名の項目数（親見出しと子見出しの合計）

史記抄	三、〇六八	万葉集	八、四〇四
毛詩抄	八〇五	源氏物語	一一、三八五
玉塵抄	二、三一一	枕草子	三、四一九
中華若木詩抄	一、一九二	今昔物語	四、三九六
虎明本狂言	三、六八六	平家物語	七、五七三
天草本平家物語	九〇三	徒然草	二、三八一
天草本伊曽保	一、〇二四	太平記	九、二〇四

数字は用例数ではなく、文献名が現れる項目数である。一項目に複数の用例がある（助詞「に」には徒然草が20例もある。）ほか、次のような注意が必要である。

中世資料のうち『毛詩抄』は古活字本・京大十冊本・両足院本の合計である。また、『万葉集』『徒然草』『太平記』などには同書名を含む近世文献が少なからずある。それらは気づいた限りは除外したが完全ではない。従って、数字はあくまで用例の多寡をうかがうための目安である。

ともあれ、『万葉』や『源氏』、あるいは『今昔』『平家』ほどではないにしても、『史記抄』が『玉塵抄』や『虎明本狂言』と並んで室町時代の語彙資料として多数の引例があり、重要な位置にあることは伺えるであろう。

なお、一般には室町時代語資料として論じられるこ

との多くない太平記の数字は、筆者には意外な事実であったことを附記しておく。

3．『史記抄』を出典とする用例の分類

一般に、辞典の用例の在り方には、いくつか異なる意味がある。歴史主義の立場から初出例（最古例）を優先する方針もあれば、語釈を裏づけるのに有益な例を先立てたり、著名な文学作品における例を重視する立場も当然考えられる。日国の凡例によると、初出例を採るとしながら他の方針も併用しているから、やや曖昧である。

今回の調査では、日国に載る『史記抄』の用例を総て当たり、四つの型に分類した。

★単独例　『史記抄』のみで立項されているもの。

◎初出例　『史記抄』が初出例であるもの。

○最初例　『史記抄』が意味項目の初出例であるもの。

・一般例　『史記抄』が一例に過ぎないもの。

結果は次の通りである。数字は項目数で、複数の用例をもつ項目では一例でも最初例があればそれに分類した。対照するために『徒然草』についても同様の調査を行ったので並記しておく。括弧内は百分比である。

『史記抄』★152（5.0）◎1237（40.3）○409（13.3）・1270（41.4）計3068

『徒然草』★69（3.9）◎179（7.8）○219（9.6）・1825（79.6）計2292

『徒然草』の総計が前表より大幅に少ないのは、類名書の排除が完全でない可能性があり、また語釈中の解説に書名がしばしば現れるためでもある。

ともあれ、比較すれば、日国における引例の在り方が明らかに異なっていることが分かる。『史記抄』が一般例に匹敵するだけの初出例をもつのに対して、『徒然草』は一般例が80％近くを占め、初出例、最初例が一桁の比率でしかない。この数字の相違は日国が二つの文献をどのように利用しているかを示すものではあるが、結果的にそれぞれの文献の語彙資料としての性格の違いを表している。

『史記抄』が新出語を数多く含むのに反して、『徒然草』は古代語（特に和文語）の最後の典拠としての役割を果たしている。実際、日国の語釈の中で『徒然草』の用例が最後にある例が多く見られる。歴史的な見地から言えば、『徒然草』の用例の多くにはほとんど意味がない。

4．単独例の語について

『史記抄』（以下「本抄」という。）の語彙を具体的に検

討する。最初に単独例の語を語種別に掲げる。

【和語】79　あいだてなさ　明け明け　あっつろう　索り出す　甘々と　雨垂れ際　偽り計る　祈り祓い　入れ組む　入れ黒子　うちこくりな　腕もち　厩の者　占屋文　追こくら　追い千切る　大酒屋　置き売り　従曽祖王父　推し捏ぬる　教う　おそ悪い　追っけ病み　かしあぐ　数え立つる　片足踊り　片違え　彼奴っ　彼奴　角がち　噛み　みしゃらかす　気後るる　毛が先ほども　心宛い　轂　こする　栄やす　猿の餅換ゆる様に　知ったり顔　信濃棗　痱つる　しゃつ　直目な　健やか者　拵り盗み　たたくらかす　祟り巫女　つっと寄り　詰めては　出来す　〜でもあれ　衒立つる　衒立をする　何でまり　逃らす　化らしさ　鼻うそやかす　食み入る　僻事者　深入る　圧し屈むる　下手くろうしい　真っ直目な　豆粥　まるかり　まん〜　三重酒　みしゃらかす　見たうもなさ　申し明かす　物言い立て　物恐ろしい　物食い時　物食いだうな　やいや　やっや　湯浴び処　良い珠の瑕　悪げ

【漢語（字音語）】51　悪月　依帰　害　皆朱椀　漢書家　銀印　今文　姤　甲寅　庚子　坐贓　至悪　著亀　史記家　次行　食欲　爵封　爵邑　従父兄弟　獣面人心　将印　小吉　常師　縄枢　少牢　上郎比丘尼　諸表　書府　辛亥　制詔　星図　筮法　石田　即祚　素木　大根器　大篆　韃靼人　端門　治生　中家　伝国　同功一体　幕中　抜山　尾露判官・尾籠判官　附益　婦家　腐刑　不調人　門奉行

【混種語】14　兼ね療治　義立て　十に一二　熟烹する　請見する　上僧する　上郎車　随分なる者　世知弁ない　空道者　大名ぶる　番宿直　賓客持ち扱い　物狂がましい

【オノマトペ】5　たんぷらと　ちっくらと　ぬったと　ぬったりと　ふっくと

【その他】3　あんけ　ふつくちき　物が臭い

和語の名詞では「知ったり顔」が興味深い。日国とは異なる2例を引く。

・昔ノ五覇ナントノ、道理ヲ知タリカヲ、シテ（11−55ウ12）

・トノ字ヲ置タカワルイナント、知タリカヲ、シテ云ヘキ事テハナイソ。（14−69ウ10）

これらを「したり顔」と読む可能性もないではないが、それには次の例がある。

・結句、ヨツシタリカヲ、シテ、闔閭城ナント、読ハ、ヲカシイソ。（9−54オ11）

だとすれば、やはり「知ったり顔」と読むほかはなく、「したり顔」の語源俗解的な用法であろうか。

和語の動詞には、接尾語「〜かす」をもつ語が目立

つ。「栄やす、逃らす」も「栄やかす、逃らかす」が更に変化した語形かもしれない。また、今日も用いる名詞「気後れ」「深入り」の動詞形「気後るる」「深入る」がある。日国の例文は

・先ツ一刀、ツフトツイタ者カ勝ソ。気ヲクレテハ、カナウマイソテアルホトニ（5-3オ12）

・空無匈奴　驃騎カ、アマリ深入テ攻タホトニソ。（16-6ウ7）

を引くが、後者は疑わしい。本抄の表記からみて、

・楚師ハ、思マヽニ深入テ、鴻門マテキタソ。（4-57ウ5）

と同様に、「深く入って」と読むべきものである。単独例は一つ減じることになる。

和語の形容詞「物恐ろしい」は次の例文である。

・事カ若ナラウ時ハ、秦ノモノヲトロシク、三族ヲ夷タリナントセウスト思テ（6-24オ2）

「恐ろしい」を「おとろしい」と言うのは広く西日本方言に見られるが、文献上の初出は案外に新しく、日国は浮世草子『忘花』1696を初出とする。「ものおどろしく」でないとすれば、本抄の例は非常に早いものになる。

和語の副詞「詰めては」は「結局は」の意で用いられる。日国とは別の2例を示す。

・ツメテハ、訟モ誦モ公モ、同シ心ナリ。（6-81ウ9）

・チット再発ハスレトモ、ツメテハ、ナヲラウソ。（17-48ウ2）

本抄には類義の「詰めに」「詰めは」もあり、後者は本抄が初出である。

・此二ノ者ハ、ツメニ何ニ帰スルソナレハ（18-33オ1）

・湯モ如此ナホトニ、ツメハ自殺シタソト、人ニシメサフトテ云ソ。（15-45オ4）

さらに、類義語「挙句」「結句」が本抄には見える。

・飢饉ノアケクニ疫病ハ定タ事ソ。（7-52オ5）

・暴富ニナリタカ、アケクノハテヲ見ヨヤレト、後世ノ人ヲ戒ムルハ。（16-34ウ5）

・一生ツヨウ疲労シテ、ケツク、ハヤ死ヲシタソ。（10-8ウ12）

・韓非ヲチ殺サレテ、結句ノハテニ、為臣ト請コトハ、ナントアラウソ。（4-11オ12）

一文献に併存する類義語の細かな用法の相違を明らかにすることは、今後の課題である。

漢語（字音語）・混種語には特異な語が多く、ここでは触れない。ただ、「じきよく（食欲）」の例文として引かれる

・天竺ハ姪慾カ熾ニ、支那ハ食慾、日本ハ財欲ト云ソ。（16-31オ10）

は、日国の「しょくよく」の初出例でもあることは注

意しておく。

その他とした3語には問題がある。まず、「あんけ」の例文は次の文である。

・魚ノゴミニヨウテ、口ヲ開テ、アンケトシテヲルナリソ。（17-13ウ12）

日国は「あけ（開け）の変化した語」で「あんぐり」に同じとするが、既に「口ヲ開テ」とあるのだから、畳語表現ではなく、魚臭に酔って「ぼんやり」或いは「呆然」とした擬態語ではないだろうか。

「ふつくちき」は正確には語ではない。次の様に漢字音の舌内入声韻尾の「送り仮名」（本抄が初出例）表記のことである。

・入声ニフツクチキト云ヲクリ仮名アリト云フハ、此ヲ云ソ。（4-35オ12）

「物が臭い」も疑問の語である。

・酌テ飲メハ、モノカクサイト云テ、ウツフイテ牛飲スルソ。（2-52ウ2）

盃では面倒だと、酒の容器に口をつけて直接に飲む様子だが、

・諸事モノクサウテイタホトニ、疲労シタマテ、コソアレ。（4-43オ3）

と用いられる形容詞「ものぐさい」を異分析した一時的な言葉遊びのように思える。前述の「したり顔」を「知ったり顔」とする例である。「ふつくちき」と同じく、単独例であるのも当然といえよう。

5．初出例の語について

初出例を語種別に分類すると、和語481、漢語635、混種語98、オノマトペ24となる。総てを詳しく検討する余裕がないが、本抄の語彙的性格を特徴的に示すものであるから、語種ごとに適宜抽出して述べることにする。

5―1　初出例の和語

和語の名詞には、今日でも日常的に用いる語が多数含まれる。

開け閉て　余り物　あれこれ　言い損ない　行く先　今時　腕捲り　追い剥ぎ　大商い　大恥　大人しげ　御供　御休所　買い置き　欠け落ち　小銭　幸先　先走り　先程　仕方　品物　拗ね者　立居振舞　血だらけ　面の皮　手首　取り合わせ　泥だらけ　投げやり　握り拳　歯軋り　旗印　早死に　腹這い　膝頭　膝の皿　人当たり　人集め　日取り　古傷　待ち人　真っ盛り　目処　目の玉　物入り

前節で引いた「送り仮名」と並んで「仮名遣い」も初出例の中である。

・日本ノ仮名ツカイノヤウニ、ツケヲイタ名チヤソ。（14-24ウ4）

両語とも、今日の日本語学で用いる所とは意味を異にするが、語自体は既に存したのである。

次の諸語は中世語らしい名詞と言えるだろうか。

いかはち　うろうろ涙　折り目高　戯(じや)れ者　尻肢(えだ)
きぶさ　曲人(くせびと)　曲奴(くせやつ)　隅違(すみちが)い　そんじょう其処(そこ)
たくらだ　血酔(ちえ)い　成り掛かり　髭(ひげ)むく　へり
道(みち)　真様(まさま)　横様筋交(よこさますじかい)　読みつけ

名詞の内から、筆者の関心に従って「柿の蒂・楚・天鶴脛・日向脹り」の4語につい例文を紹介する。

「柿の蒂(へた)」は、狭い土地や領地の比喩として用いられる。

・弾丸之地トハ、チツトシタ、柿ノヘタホトノ処ト云心ソ。（11-24ウ10）

・柿ノヘタホトノ所領ヲ、取テモチテ　（11-106オ6）

「楚(すわい)」は古くは「すわえ」で、「木の枝」の意味である。

・鞭ハ、革テシタムチソ。朴(ホウ)ハ、木ノスワイテスルソ。（2-35オ2）

・荊ハ荊楚トテ、薪ノ中ノ長イスワイソ。鞭ノ事ソ。（11-50ウ2）

語形を確定しがたいが、後に「ずわい」となり、山陰や北陸に産する和名ズワイガニはこの語によって命名されたと思われる。

「天鶴脛」は3例ある。

・御意ノヨイ慎夫人タニモ天鶴脛ナラハ、其餘ハ思ヤラレタソ。（7-29ウ4）

・ツヨク寒ク、カナシイ者ハ、テンツルハキナルキルモノテマリ大切ナホトニ（4-67ウ8）

・テンツルハキナ者ノ舞ハ、ミラレヌソ。（11-44ウ10）

いずれも、貧しいために服が身の丈に足りず、脛をむき出しにした様である。日国には「つんつる・つんつるてん」を載せる。「はぎ」が脱落した「てんつる」の変化形または顛倒語形らしく、由来が案外に古いのである。

「日向(ひなたぶく)脹り」は次の例である。

・暴於ーー　ヒナタフクリソ。（14-46ウ9）

冬に日向で憩う様子を「ひなたぼっこ」と言うが、その原形が「ひなたぶくり」で、冬の季語「ふくら雀」も同じ発想の語である。

和語の動詞は現代語に繋がるものと、中世語らしいものとに分かれる。現代に近いのは、

仰(あお)のく　跡を慕う　行き届く　嫌がる　生まれ合わする　押し止むる　思い当たる　買い置く　屈む　刈り込む　傷付くる　気に入る　切り離す　口を開く　拵ゆる　こみ上ぐる　責め殺す　蓄ゆる　だらくる　連れ歩く　出迎ゆる　無い物にす

る　成り上がる　引っ被る　引っ込むる　踏み出す　ぶら下がる　へし折る　見誤る　見損なう
齎す　病み付く　譲り合う

など数多くある。複合動詞が多い。一方、中世語らしいのは、

並生える　怖ぢひろめく　おりある　肥えびちらく　こみつ　すつをかわく　どぐりめく　ひちらく　ぶきめく　むくり出る　わさめく　私びる

などであろうか。漢字表記になじまない語が多く、やはり複合語が多い。

動詞の語形では次の記事がある。

・京ノ儒者ハ城ト読ソ。鎌倉ニハ城トスンテ読ソ。（2-125ウ1）

・囲ヲモ、京儒ハ囲トヨメハ、鎌倉ニハ囲ト、スムソ。（2-125ウ2）

古活字本では知り得ないのだが、写本では京都では「きづく」「かごむ」と読むのを、鎌倉では「きつく」「かこむ」と清濁を違えて読むと記す。「囲む」を「かごむ」というのは異様だが、童謡の歌詞「かごめ、かごめ。籠の中の鳥は……」が伝える様に、ある時期の京都周辺では「かごむ」の語形があったのである。亀井孝氏に論文「かァごめかごめ」（『日本語のすがたとこころ（二）』吉川弘文館1985所収）がある。

現代語に近い語形でも意味あいが相当に異なるのではないかと思われる語がある。「こまさくるる」という語で、次の様に用いられている。

・孤児九歳已下ナルハ、イカニコマサクレタル者モ、九歳已下テハ未交会モノソ。（7-12ウ8）

「未交会」とは、まだ男女が接しないことをいう。つまり、「こまさくれたる者」とは「こましゃくれた子供」には違いないものの、それが十歳以上であれば子供ながら大人と同様の行動をとる（男女が接する）という意である。表面的な仕草が大人びている子供という程度の現代語とは意味合いが異なるのである。

余談だが、名詞の初出例に「酒友達」があるように、動詞にも「酒に飲まるる」がある。

・使レ酒ト点シテ、コヽラニ酒ニノマルヽト云ヤウニ心得ハ、ワルイソ。（14-5ウ9）

学生時代に『中華若木詩抄』を読んだとき、そこに「二日酔い・三日酔い」が載っているのを見て独り喜んだ記憶を思い起こす。

・酒病ハ二日酔、三日酔ノコト也。（寛永版、上28オ）

因みに、「三日酔い」はまだ日国に採用されていない。

和語の形容詞にも興味深い語が多くある。現代語に近いのは、

哀れがましい　きつい　与し易い　面の皮の厚い
見すぼらしい　むさい

などで、中世語らしいのは

角がましい　付きも無い　つべらしい　化け化け
しい　平い　見良い

などである。

この中に、現代の女性に愛好される「可愛い」がある。

・罪モナイ父母ヤ妻子ヤ同産ノ兄弟マテ、ツミセラル、ハ、カワイ、事ソ。（7-9ウ9）

・我カ子ヲ食ヘハ、アマリ不仁ニモアリ、カワイウテ不忍食ホトニ　（11-22オ11）

例文から明らかな様に、「可愛そう、哀れな」の意である。

副詞は数が多い。その中には、オノマトペと紛らわしい

　えいおう　えいと　ちっとは　ちょっと　なっく
　まっと　むくと　むったと　めたと　めとと

などがあり、「何」を語基にする

　何として　何としても　何ともない　何とも　何
　ともあれ

もある。ここでは、「えいおう・えいと・なっく・矢っ張り」を取り上げる。

「えいおう」は掛け声と紛らわしいが普通の副詞である。名詞、あるいは形容動詞語幹のような

・此間、エイヲウノ事テ、イヤトヲセラレタヲ
（7-11ウ8）

・此ハ三教之事ニ、エイヲウノ云イ事カアルソ。
（10-2オ10）

もあるが、

・詩話ナントニハ、エイオフ云タソ。（16-3オ4）

があるから副詞としてよい。「あれこれ、うるさく」といった意である。

「えいと」は次の様に用いられる。

・此等ハ、エイトノ事ヲ、チヤツ、、ト取テカイタソ。（3-20ウ2）

・エイトノ事カアレトモ、占ニハ不入コトソ。
（17-9オ7）

「さまざま」または「多くの」の意で、これも名詞や形容動詞語幹のようにも見えるが、

・時ノ人、文章モ詩モエイト云テ、言ハテツレハ、言未尽ニ　（3-3ウ12）

の例がある。現代の方言などに広く用いらる程度副詞「えっと」の原形であろう。

「なっく」は日葡辞書にも載る副詞で、「案外に早く、事が実現すること。または、終わること」ことを表す。

・トコナ桓公ホト、イカイ人ヲ、一剣ヲ抜テ胸ニサシツケテ、此間取タル魯故地ヲカヘサウカ、カヘスマイ歟ト云テ、ナツクトリカヘイタソ。
（11-58ウ8）

「矢っ張り」は次の通りである。

・一度音カヨケレハトテ、ヤツハリヲイテハ、ワ

ルカラウソ。（11-51オ11）

・一定死ナウト知タラハ、ヤツハリヲイテ（13-40ウ9）

本抄には「矢張り」もあって「おく（置）」の続く例がある。

・手足ヲ、チツトモ、ヤハリヲカスシテ、置キカユル病者カアルソ。（13-48ウ1）

・銭ヲ多ニセウト思ワハ、チツトモヤハリ置テハ、カナウマイソ。（18-15オ12）

「やはりおく」で「そのままにしておく。放置する。」の意で、次の「～イル」も同意であろう。

・トコニ其時老タト云テ、ヤハリアタ、カニシテイテ（14-21ウ10）

・他人ヲ雇テ、銭ヲ出テ、我ハヤハリ居ルヲ、居更ト云ソ。（16-23オ11）

つまり、「矢っ張り、矢張り」は積極的な動作をせず、無為にある様を表す語である。

近世の例だが、安原貞室の『かたこと』（1650刊）に

・其侭そこにあれと云べきを、やっぱり、やはり、やっぱしなどいふは如何。（巻五）

とある。「やっぱし」という語形は新しいが、「其侭そこにあれ」という意識はまだ残っていたのである。

その他の和語については割愛する。ただ、狂言資料やキリシタン資料でありふれた過去否定の助動詞「なんだ」が、日国では本抄を初出例としている。

・ヤミツイテ、一年アマリ、ナヲリヱナンタソ。（6-69オ4）

5―2　初出例の漢語

初出例の600を超える漢語の中には、今日も学問的な場で日常的に用いる語がある。

韻書　衍字　古本　雑記　雑書　直筆　自序　自叙伝　写本　助辞　造語　他本　凡例　標出　標題　分類　別字　補遺　未詳　無文字　略字　略図　論著

現代の一般語に通じるのは次の語で、これらが本抄にまとまって現れるというのは驚きである。

異見　迂回　迂闊　有無　謁見　賀状　感慨　気概　機微　気脈　誇示　再任　残酷　刺殺　死者　始末　習熟　城下　正午　精米　勢力　接待　先駆　総計　属国　対陣　体制　脱兎　多弁　短剣　短所　歎賞　治水　地名　鉄器　転移　投書　難解　廃棄　敗走　微意　鼻孔　被服　部署　不利　奮発　平穏　米価　方位　発端　捕虜　埋蔵　愉快　羊毛　利息　和解

元来は『史記』の語だが、「酒池肉林・大同小異・贔屓偏頗」も初出例の内である。

勿論、和語「可愛い」の場合と同様、語形は同じでも意味・用法が現代と同じとは限らない。例えば「愉

快」は、日国では名詞・形容動詞に分類されるが、本抄では

・武健厳酷ナル者テナウテハ、其任ニタヘテ、愉快スル事ハアルマイソ。（15-29ウ9）

と漢語サ変動詞で混種語なのである。日国の語釈「楽しく気分よくすること。」は、いささか現代的すぎて「武健厳酷ナル者」に相応しくない。「滞りなく事を進める」といった意味であろう。

「始末」は本抄の

・イカニ簡古ニセウトテモ、事ノ始末カサラリトキコエイテハ、史筆テハアルマイソ。（3-20ウ4）

・前後始末カ、捻シテ所問ノ事テモナイ事カ、撰著ニモアルソ。（17-40オ3）

から、『日葡辞書』までの短期間に

①事の始めと終り ↓ ②事の次第 ↓ ③物事の決まり、締め括り ↓ ④倹約

と次々に意味を派生する。

金銭に関わる語として「利息」が本抄に見える。

・子孫トモカ父祖ノ業ヲ相続テ、利息ヲヨクスルホトニ、遂至巨万タソ。（18-16ウ11）

・マクリ出テ、カシタホトニ、其利息カ什倍スルソ。（18-45ウ10）

この語は「息利」ともいう。

・其息利ヲ取テハ、客ヲヤシナワウトテソ。（11-19オ8）

日国に『続日本紀』『日本後記』の例を挙げるから、こちらが国内では本来の語形であったらしい。今は「利子」とも言うが、「息」や「子」で造語される理由を、本抄では

・其息トハ、息ハ物ノタネヲツイテ、テクルヲ云ソ。人ノ子ヲ子息ト云モ其心ソ。（11-19オ2）

と、人が父から息子へ家族を増やす様に、金が金を産んで増していくことからだと説明している。後に井原西鶴が『日本永代蔵』で

・只銀がかねをためる世の中といへり。

と喝破したが、その淵源は中世に兆していたのである。

5―3 初出例の混種語

混種語は数と種類を増す。それだけ漢語が日本語の中で勢力を広げ、一体化していたことを示すのだと思われる。名詞には次の語がある。

鬱陶しさ　折り本　変わり様　公界者　口伎倆
傾城狂い　化粧軍　化粧所　最先　次第下り　宿
送り　所作柄　脛苦行　索麺被き　使い様　友同
士　平百姓　又若党　真っ最中　目様　理運げ
牢腐し　輪束

「公界者」は網野善彦氏（『無縁・公界・楽』平凡社1978）によって有名になった非定住民ではなく、まだ原義的

な意味である。

・魯仲連ハ人ニモ不仕シテ公界モノテ、我ハ人臣チヤホトニ　（11-55オ9）

・言ハ、天下ハ公界モノテサフソ。（14-3オ7）

「口伎倆」は現代にも通じる「口先だけ巧みなこと」である。

・口伎倆ニ云ホトニ、ヨイモノカト思タレハ、サモナイホトニ、失タソ。（10-54ウ5）

「化粧軍」は最初読んだときには理解できなかった語だが、

・挑戦ハ、ヲヒキ出サウトテ、ケシヤウイクサヲスルソ。（11-9オ12）

から分かる様に、見せかけの攻撃のことである。日国の用例より本例の方が理解しやすい。

「索麺被き」は日国に引かれていない例を示す。

・皤然ーー　漢書ニハ、皤ハ作暠ソ。王母カナリソ。索麺カツキナルナリソ。（14-51オ6）

この例では分かりにくいが、頭髪が索麺のような白髪の老女のことである。譬喩に取り入れられるほど「索麺」という新食品が普及していたのであろう。

「目様」も本抄が初出だが、新語というよりは古代語の残存かもしれない。なぜなら、

・目ヤウ、カヲヤウノワルイヲ見テソ。（14-36ウ3）

と「顔やう」とともに用いられ、その「顔よう」は宇津保物語や源氏物語に現れる平安時代の和文語だからである。類義的な「目つき・顔つき」と併存し、やがてそれらに取って代わられる。

混種語には「鬱陶しさ」「理運げ」、あるいは「大事がる」「無慙がる」があるように、和語の接尾辞が自由につくほどに漢語の国語化が進んでいたことを示している。同様に、多くの漢語サ変動詞が含まれる外、漢語サ変動詞と和語動詞が複合した動詞もある。

案じ澄ます　案じ出す　図抜く　論じ詰むる

これらは日本語の語彙を豊かにする一助をなしたのである。同様のことは形容詞や副詞についても言える。

（形容詞）　恩でもない　造作もない　名聞がましい　面目が無い

（副詞）　案ずるに　盛に　是非に　無私に

などで、中でも「恩でもない」は狂言の常套表現にまでなっている。

5―4　初出例のオノマトペ

オノマトペは興味深い語形が多いから総て示しておく。

うからと　うっからと　がつがつ　きかと　きっとした　きっぱと　きらりと　ぐらぐらと　さっぱと　しっとと　しろりと　すきと　すたすた

すっと　すらり　すんすんと　そっそと　だくだ

くと　ちっくちくと　ちっこと　ぶらぶら　ほっくりと　むかむかと　わじわじと

多彩だが問題も多い。清濁表記の乏しい抄物では、日国の掲げる語形が必ずしも確実とは言い難いからである。例えば、日国が「きらりと」の例文とする

・地図ノヲクニ匕首ヲ巻キソヘタカ、発ヲ開タホトニ、匕首カキラリト見ヘタソ。（11-81ウ6）

が、「ぎらりと」でないと言えるだろうか。また、日国は

・メクハセスト云テ、シロリトニラミ見ニミルソ。（11-78ウ7）

を「しろり」の用例として「じろり」に同じとするが、「ニラミ見」であれば「じろり」ではないかと疑われる。同様のことは、「すらり」の例

・土崩ハ世界カスラリ崩ソ。瓦解ハチツト破ソ。（14-32オ5）

で、「世界」（地域）が崩壊する様でありながら、「ずらり」ではなく「すらり」であると積極的に言う根拠があるのかと問われれば、答えに窮するであろう。

以上は、清音形を濁音形かと疑う例だが、「だくだく」「わじわじ」の例

・心動　胸カ、タク、ントシタソ。（11-77オ1）

・寒心スルトハ、身毛モヨタツハカリト云心ソ。寒イ時、ワチ、ント振フ様ナソ。（11-79オ11）

も、仮にロドリゲス『日本大文典』（dacudacuto）や『日葡辞書』（Vagiuagito）に用例がなかったとすれば、語形の決定に迷う所である。

抄物には多くのオノマトペが現れ、それが抄物の言語資料としての価値の一つとなっているのは確かだが、語形の認定の問題や、個人的・臨時的なものかどうかという判定も難しいのが実状である。音形が重要なオノマトペについて、抄物の例のみで論ずるのは危いのである。

6．日国における用例配列の問題

最初例、一般例の語について述べることは割愛せざるを得ないが、それらを分類するときに抱いた疑問について触れておかねばならない。

本調査では、初出例や最初例の認定は辞典の配列に従って形式的に行ったが、そこで不可解な事実があるのに気づいた。例えば、本抄と『文明本節用集』とに用例があるとき、本抄を文明本に先立てるのが原則のようだが、それが必ずしも徹底していないのである。

二つの文献名を重ねて検索すると、全体で107例が得られる。そのうち60例は本抄が先だが、残る47例では文明本が先に載っている。しかも、その内の28例は本稿の調査結果に影響を与える可能性がある。

具体的に言うと、本抄を文明本に先立てるとすれば、次の25例が一般例から初出例に転じることになる。

片反(そ)る　簡易　義強(ごわ)　奇兵　強国　欣喜　勤旧
皷する　直筆　次序　親しんず　鴟吻　上焦　衰
世　生業(すぎわい)　適意　ふぐり風　持ち来る　約盟　憂
思　利得　流落　分け付くる

また、次の3例は最初例となる。

絶する　暴(ぼう)　無理

3節で述べた本抄が日国に提供する初出例の数はさらに増すことになる。

これとは別に、筆者には気がかりな事実がある。一般例の漢語の中に、初出例が『本朝文粋』1060で本抄がその次という例の存在である。

驍勇　至言　獣心　諸儒　政教　繊微　退居　背
上　扶翼　民風

気になるのは、抄者桃源が『本朝文粋』を読んでいたらしいことである。

・惣シテ日本ニ文粋トテアルカ、皆ヨキ文ナリ。ナニトテ、今ハムケニ零落シツラウソ。（6-79ウ～80オ）

従って、前記の漢語は桃源が『本朝文粋』から直接に学んだ可能性があり、だとすれば歴史的な意味でいう第2例とはいささか事情が異なるのではないか。もっとも、これに類することは『続日本紀』や『令義解』『菅家文草』などとの間でも見られるから、漢語の淵源である漢籍類を介して本抄との関わりが生じたと考えれば、ひとまず納得のいく事実ではある。

7．日国における『史記抄』用例の問題点

先に「深入り」の動詞形「深入る」を誤認と指摘したが、それに類する誤り、あるいは疑問が他にもある。

まずは、本文の誤読・誤認による誤りと思われる例である。単独例の「偽り計る」は、例文を

・（略）詐りはかりては誅せらるるまでてあらうすか

とするが、原文は次の通りである。

・詐リハカリテハ、誅セラル、マテ、アラウスカ、三族マテハト思タレハ、詐リマテ、ハナウテ、結句、謀反シタホトニ、ケニモナリ。（7-24ウ3）

「詐リバカリ」と「詐リマデデハナウテ」を対比した文で、

詐りだけであれば、本人が殺されるだけであるのに、三族（父母・兄弟・妻子）まで殺されたのは、詐りだけでなく、結局は謀反を起こしたからであり、尤もなことだ。

と解釈できる。つまり、助詞「ばかり」を動詞「計る」に誤認したものである。

同じく単独例の「おそ悪い」の用例を

・駑下は、いやしいおそわるい馬の様なものと云心ぞ

と掲げるが、正しくは、

・駑下ハイヤシイ才ソ。ワルイ馬ノ様ナモノト云心ソ。（11-86オ10）

である。漢字「才」を片仮名の「オ」と誤認して次文と繋いだ誤りである。

また、初出例の和語に「湯浴び」があり、例文を

・挙とは取あげて、養て湯あひせつなんとするを云ぞ

とするが、「湯浴び」が名詞だとすると、続く「せつなんとするを」の解釈が難しい。原文は

・挙トハ、取アケテ養テ、湯アヒセツナントスルヲ云ソ。（11-15ウ2）

とあって、「湯浴びせつなんどするを」と解すべきである。動詞「（湯を）あびせる」（初出例に近い。）に本抄で常用される例示的用法「～つなんど」が下接したものである。

単純な誤りだが、「ちゃちゃと」の②義に本抄の

・節と云は、竹に有節様に、あるべい処にちゃちゃと、一てまり落したりなんどはせいであるぞ

を引くが、正しくは「チヤウ、ト」（16-38オ10）で、日国の「ちょうちょう（丁丁）」の項に該当する。その②義に土井本『周易抄』が竹の節に関する比喩として用いた例がある。

・節は、竹のふしは、上下ちょうちょうどそこそこに節義があるぞ

本抄から「ちゃちゃと」の例を引くとすれば、次がある。

・アノ様ナ者ノクセテ、奇特ニ先ツ云フ事カ、チヤ、ト合ソ。（8-4オ2）

誤りと言えないものの、疑問が残るものがある。

副詞「ふつと」の②義（下に打消の語を伴う陳述副詞的用法）の例に、本抄から

・三女があって、密康公に奔たぞ。奔と云はふつと康公を憑て従たぞ

を引くが、下に打消の語は見えない。本抄には該当する文例が

・諫タレトモ、フツトキカマイニキワマツタホトニ（14-70オ3）

など14例もあるのだから、それから引くべきである。

語釈については、辞典の編集者や項目執筆者の見識によるから、その適否を一概に論じることは控えるべきであろう。それにしても、いささか首を傾げたくなるものがある。

日国は、本抄の

・時坐席中酒酎　トハ酒ノ最中ソ。（16-52オ4）

を、「さいちゅう（最中）」の■③義「最も勢いの盛んなもの。その仲間のなかで、はぶりのよい者。」の例とするが、疑わしい。日国では史記原文を読み下して「時に坐席中酒にして酎なり」を加えるけれども、

「酎」に「優れた酒」の意はない。本抄には、「まっ最中」の例として、

・酣ハ、酒ノマツ最中ヲ云ソ。（11-49ウ12）

がある。これに倣って先の例も②義の「（酒盛りの）たけなわ」でよいのではないか。

次の例が、「さしはる（差し張る）」の[1]義「でしゃばる。さし出る。」の初出とされる。

・サノミサシハリテ、我カマ、ノヤウニハ云ワヌソ。（14-31オ5）

しかし、文に「さのみ……云わぬぞ」とあるように、この「さしはる」は行動を伴わず、単に声を上げている状態にすぎない。日国の「はる（張・貼）」の[3]①義に示す様に、謡曲などで「声を強く出す。」に相当する。行動を伴って「さしはる」のが「でしゃばる＜出さしはる」であろう。

最後に、「しゅくじ（祝辞）」を「祝いの気持ちを述べることば」として、本抄の

・某事某事ニ依テ、祝辞カカワルソ。（17-44オ11）

を初出例とするが、この直前の文が

・自此以下モ、皆トスルトキノ祝辞トモソ。（17-44オ10）

であるように、本抄の「祝辞」は総て卜筮（占い）の文脈に現れる。つまり、今日の「祝辞」とは違って、占い事として唱える言葉なのである。

8. まとめ

本稿では、室町時代の前期抄物を代表する『史記抄』の語彙的性格を、『日本国語大辞典　第二版』における用例の在り方を通して考えてみた。

その結果、本抄が多くの単独例、初出例、最初例の典拠となっている事実を指摘することができ、中世語彙資料として重要性を改めて示すことができた。論中では触れなかったが、「帯解き広げ」のように本抄を初出とすべき語は少なくないが、それらの指摘は別の機会を得たい。

日本語史の立場から言えば、『史記抄』に初出例が多いことは、必ずしも誇るべきことではない。室町時代初期（14世紀～15世紀初頭）の口頭語資料が欠如している実態の反映と認めざるをえないからである。

（注）本稿は2014年12月6日に開催された島根大学法文学部国文学会における同名の講演を改稿したものである。

（本学教授）